

反語文の“不是…（吗）？”について

—日本語と比較しながら—

曹 泰和

（お茶の水女子大学院）

有关“不是…（吗）？”的语义前提前人已有所论述。一是受话人对信息已知，二是说话人认为受话人的观点不对或不清楚需要扭转或需澄清。但以往的论述并不很具体。本文通过与日文的「～ではない（か）」的对比，使之语义条件更为突出，并找出“不是…（吗）？”所不具备的语用功能，追究其原因何在？此外，本文对已提出的语义前提稍加补充，指出受话人有无认识能力也是能否使用“不是…（吗）？”的前提之一。并表示说话人与受话人的认识或状况不统一的“先行语”什么时候可以省略什么时候不可省略的问题稍加提示。本文还对“不是…（吗）？”所体现出的意外性加以分析，指出其出现的语言环境。本文接着讨论“不是…（吗）？”在表达判断时所体现出的说话人的语气强弱的问题。最后，通过对日语要求确认的表达及汉语要求说明原因的表达的分析，指出在相同语言环境下的不同语义特征。

0. 問題提起
1. 情報の有無について
2. 認識と状況のギャップについて
3. 意外性について
4. 判断のモダリティについて
5. 「確認要求表現」と「原因追究表現」
6. むすび

0. 問題の提起

従来の研究によると、劉月華（1991）は「反語文の働きは、ある明らかな道理や事実に対して反語の語気を使ってそれを肯定または否定することによって語調を強めることにある。」と修辭的に説明している。また、蕭国政（1997）は“……不是……？这类反意，细细品来语表式比语里式语气

強烈、要使两式全等，语里式要在‘是’前面加上‘的确’‘就’等语气词。”とさらに具体的に述べている。蕭氏の観点から言うと、反語文の“……不是……？”＝肯定文の“……就是……”になる。しかし、“那男的不是犯人吗？”と“那男的就是犯人。”の「命題」が等価であっても、話し手の捉え方が異なるので、意味的には決して同じとは言えない。具体的に言うと、“那男的不是犯人吗？”の場合は“为什么放出来了呢？”のような言外の意味を連想させるが、“那男的就是犯人。”の場合はこのような言外の意味は考えにくい。

さらに、反語文と平叙文における意味的相違として、邵敬敏(1996)は“反问句显示说话人内心的不满情绪。……，这种不满情绪的发泄是一般句式很难显示的。”と論じ、語用論の観点から反語文の意味的特徴を探ろうとした。しかし、次のような例を見ると、これは反語文と平叙文の根本的な違いではないことに気づく。

(1) a. 你这不是在故意制造紧张空气吗？

b. 你这就是在故意制造紧张空气。

例 a も例 b も「強調」「責め」の修辭的及び語用論の意味を持っている。すなわち、反語文である a で言い表している「責め」の意味と「強調」の機能は、平叙文である b も同様に備えている。このような従来の解釈では、反語文と平叙文の本質的な違いについての記述が不十分であると言える。

本稿は、情報管理理論、およびモダリティの視点から、日本語の「～ではない(か)」「(の)ではなかったか」も含める)との比較を通し、“不是…(吗)？”の成立条件を明らかにしたい。それと同時に、機能の面では、日本語と比べてどのような相違があるのかを提示する。さらに、意外性や判断のモダリティについて論じ、“不是…(吗)？”の特徴をより浮き彫りにしたい。最後に、日本語の「確認要求表現」と中国語の「原因追究要求表現」を取り上げ、意味的特徴の相違を論じる。

1. 情報の有無について

中国語の“不是…(吗)？”の成立条件として、まず、聞き手が情報をすでに持っていないことが挙げられる。

- (2) a. おい、君のシャツのボタン、取れそうじゃないか。(宮崎 1993)
 b. * 诶，你衬衫的扣不是要掉了嗎？
- (3) a. 君はこの靴がいいと言ったけど、履いてみると、痛いじゃないか。(宮崎 1993)
 b. * 你说这鞋好，穿上一看，不是疼嗎？
- (4) a. 誕生日にプレゼントあげるって言ったじゃない。
 b. 你不是说过生日给我礼物嗎？
- (5) a. あなたは早く結婚したいと言ったじゃないか。(宮崎 1993)
 b. 你不是说想早点儿结婚嗎？（那就快点准备呀）
- (6) a. (彼に僕のズボンがかっこ悪いと言われて) よくみろよ、(僕のズボン) かっこいいじゃないか。(宮崎 1993)
 b. (他说我的裤子不好看) 你好好看看，我的裤子不是挺好看嗎？

例(2)の b と例(3)の b が不成立である理由は、聞き手が情報を持っていないからだと考えられる。聞き手の知らないこと(例(2)、ボタンが取れそうであること)、あるいは話し手自身に属する内的感覚を話題にする場合(例(3)、靴を履いてみると、(話し手の足が)痛い)は、中国語では“不是…嗎？”を用いて、聞き手に認識をさせることができない。

(4) b、(5) b、(6) b が成立する理由は、聞き手が話し手に言われた情報をすでに持っているからだと考えられる。

中国語の場合は、聞き手が情報を持っているかどうかは、“不是…嗎？”が成立するための不可欠な前提である。ところが、聞き手がその情報の前提を持っていても文が成立しない場合がある。例えば、次の例(7)の場合である。

- (7) a. あなたはこのビールがうまいと言っていたが、飲んでみたらなるほどなかなかうまいじゃないか。
 b. * 你说这个啤酒好喝，喝了后的确这不是挺好喝的吗？
 c. 你说这个啤酒难喝，喝了后这不是挺好喝的吗？

上記の例(2)は、聞き手が「シャツのボタンが取れそう」という情報を持っていないのと比べて、(7)の場合は、話し手も聞き手もビールを飲んだ。すなわち、話し手と聞き手両方が「ビール」に関する「情報」を持っている。ところが、それにもかかわらず、(7)の b は不成立である。つま

り、聞き手が情報を持たなければならないという前提は必要ではあるが、それだけでは不十分であるということになる。それでは、聞き手が情報を持つという前提以外、ほかに何が必要なのか。例(7)のbとcの違いを見てみると、bの場合は、聞き手と話し手両方とも「このビールがうまい」という共通の認識を持っている。一方、cの場合は、話し手が「このビールがうまい」、聞き手が「このビールがまずい」という互いに反対の認識を持っていて、(7)cは成立している。この話し手と聞き手の間に「認識のギャップ」があるか否かが、例(7)のbとcの文が成立するかどうかの原因ではないかと考えられる。以下から、話し手と聞き手における認識のギャップについて検証してみる。

2. 話し手と聞き手における認識のギャップについて

- (8) a. おい、背中に毛虫がついてるじゃないか。(宮崎 1993 の例)
 b. *喂, 你背后不是落个虫子吗?
 c. *你说这虫子多, 瞧, 你背后不是落个虫子吗?
 d. 我说这虫子多你不信, 瞧. 你背后不是落个虫子吗?
- (9) a. 触らないでよ、痛いじゃない。(宮崎 1993 の例)
 b. *别碰! 我不是疼吗?
 c. A: 你老哼哼什么呀? B: 我不是疼吗?
- (10) a. (優勝した友人に) やるじゃない。
 b. *这不是真棒吗?
 c. 你真棒!
- (11) a. A: この服はどう? B: うん、なかなかいいじゃない。
 b. A: 这件衣服怎么样? B: *嗯, 这不是挺好的吗?
 c. 这件衣服你说不好看, 瞧, 这不是挺好看的吗?
- (12) a. A: あ～眠い。B: コーヒーでも飲んだら目が覚めるんじゃない。
 b. A: 啊, 真困。 B: ? 喝杯咖啡不是就精神了吗? (=喝杯咖啡就精神了。)
 c. 喝杯咖啡是不是能精神精神。(喝杯咖啡怎么样?)
- (13) a. 最近って、子供の誘拐事件が多いじゃない。
 b. *最近拐骗小孩的不是挺多的吗?

c. 前几天电视上说, 最近拐骗孩子的案件很多, 你看了吧? ……

上記の日本語の文をそのまま中国語に替えると、すべて非文になる。(8) b, c (9)b (10)b (11)b (12) b (13)b) さらに機能的な面から考えると、上記の場合では、日本語の「～ではないか」によって表されている機能は、中国語の“不是…吗?” にはないということになる。

では、例(8)から例(13)の「～ではないか」では、どのような機能が示されているのか、それらの機能が中国語の“不是…吗?” においては、なぜ持っていないのかを分析してみよう。

日本語の「～ではないか」について、先行研究ではまず次の四つの機能が指摘されている。①「注意喚起」(例 8, 9); ②「評価」(例 10, 11); ③「仮説提示」(例 12); ④「話題提示」(例 13)。本稿は、反語文の“不是…吗?” が「注意喚起」「評価」「仮説提示」「話題提示」の機能が実際あるどうかを確認するため、300万字以上にわたって資料を調べた。その結果、86の例文を収集することができたが、これらの用法に当る用例は見当たらなかった。では、なぜ中国語の“不是…吗?” はこれらの機能を持っていないのかを考えてみよう。

まず、日本語の「注意喚起」の定義については、宮崎(1993)は「聞き手がまったく気づいていないことを指摘する発話である」と述べている。これに従えば、聞き手がすでに情報を持っていないからならんことを前提とする中国語の“不是…吗?” には、確かにこの機能がない。ところで、中国語の反語文は“提醒”(「注意を促す」)の機能があることが知られている。例えば、次の例である。

(14)“你别这样好不好? 别这副生离死别的样子好不好, 明天你不是还要来?” (空中小姐 王朔)

つまり、中国語の場合は、話し手は聞き手が知らないことを「注意喚起」しようとするのではなく、聞き手がすでに知っていること、しかし、聞き手ははっきり認識していないと話し手によって思われる時に、話し手がこの“不是…(吗)?” を用い、聞き手の認識をはっきりさせようとするのである。

例(8)のbとcを比べてみると、bの文において、“你说这虫子多”と“你背后落个虫子”は聞き手(“你”)の認識と聞き手が遭遇した出来事であり、

話し手の認識とは何の関わりもない文である。このような文脈では、“不是…(吗)?”は用いられない。また、cの文を見ると、“我说这虫子多”と“你不信”の発話は、話し手と聞き手との間に認識のギャップがあることを表している。“不是…(吗)?”はこのようなギャップのある文脈に用いられるときに成立している。

例(9)の場合は、話し手と聞き手の認識におけるギャップがそれほどはつきり示されていないが、Aの“你老哼哼什么呀?”の発話から、聞き手Bの「痛みがある」という認識が話し手Aにはないことが分る。つまり、“你老哼哼什么呀?”という質問によって、話し手と聞き手との間にギャップを生み出し、“我不是疼吗?”の発話を成立させたのである。

例(10)の自然な「褒めことば」としては、cのような表現であろう。反語文の“不是…吗?”に続くことばは、「マイナス表現」になることが多い。86例について調べた結果、「プラス評価」が反語の“不是”の後に続く文は一つもなかった。例(11)の“这不是挺好看的吗”の“挺好看的”はプラス評価であるものの、反駁の上の評価であるため、結局、“不是…吗?”は「プラス評価」の機能があるとは言えない。

例(12)の場合は、日本語は「仮説提示」になるが、中国語の“喝杯咖啡不是就精神了吗?”の表現は「確定表現」であり、“喝杯咖啡肯定精神”という意味であり、“你为什么 not 喝呢”のようなニュアンスが含まれている。「仮説提示」は聞き手にあることを提示するだけであり、その決定権は聞き手に委ねている。この点から見ると、「仮説提示」は一種の弱い表現と言えよう。これは、「強調」を特徴としている中国語の反語文とは異なる。日本語の「～ではないか」と中国語の“不是…吗?”は、この点で異質である。

(13)aのような例は、日常的によく用いられる表現である。この場合の「～ではないか」は、話し手が話題を切り出す際に聞き手も自分と同じ認識状態に導いていくために用いられた表現だと思われる。一方、中国語では、これまでに観察してきたように、話し手と聞き手の間で認識のギャップが感じられない場合は、“不是…吗?”を用いて、話題を切り出すことが出来ないので、(13)bは成立しない文となるわけである。

上記の(8)から(13)までの例をまとめて見ると、話し手と聞き手との間で

ギャップがない場合は非文になり、ギャップのある表現に替えると、文が成立することになる。従って、話し手と聞き手における認識のギャップの存在は“不是…吗？”を用いる条件であることが検証された。

ところで、話し手と聞き手との認識のギャップはある状況から生じる場合がある。つまり、聞き手の認識（＝聞き手の旧認識＝話し手の認識）と発話時の状況が違う場合である。例えば、“你说他不会迟到，这不是还没来吗？”のような例の場合である。

日本語と比べて異なるところは、日本語は先行の発話がなくとも、文が成り立つが、中国語は先行する文がないと成り立たないところである。例えば、次のような場合である。

- (15) a. (約束の時間に遅れてきた相手に) 遅いじゃない。(遅刻じゃない)
 b. *不是太晚了吗？(*不是迟到了吗？)
 c. 你说你这回一定不迟到(你瞧/你看)，这不是又迟到了吗？

先行する発話の働きを考えると、話し手と聞き手との間のギャップを生み出したり、また明らかにしたりするものである。逆に、話し手と聞き手の間のギャップが明らかでわざわざ言明する必要のない場合では、先行する発話の必要性もなくなる。例えば、“你手里拿的不是我的笔吗？”のような場合では、“你认为你的笔”のような発話が特に言語化されなくても、“你手里拿着我的笔”という事実から互いの認識のギャップが明らかに表されている。

さらに、述べておきたいのは、聞き手がある事態に対して認識できる能力があるかどうかも文の容認度にかかわってくるということである。例えば、次のような場合である。

- (16) 箸を持って遊んでいる幼児(3, 4才)に向かって保母は：
 a. 箸を持って遊んだら危ないじゃない。
 b. ? 拿筷子玩儿这不是太危险了吗？(? 拿筷子玩儿这不太危险吗？)
 c. 不能拿筷子玩儿，太危险了。

- (17) 子供に自転車の二人乗りが危険であることを注意している母親の発話。
 a. 二人乗りはやめなさい。危ないじゃないの。
 b. 不能骑车带人，这不是太危险了吗？

例(16)bの文は容認度は低く、(17)bの容認度は高い。その理由を考えると、“不是…吗？”の働きの一つとして、すでに述べたように、話し手は聞き手があまり認識されていないことをはっきりと認識させようとする。ところが、小さい子供に対しては「箸を持って遊ぶと危ない」という認識を持っているかどうかは確定できない。確定できなければ、認識を高める前提がなくなる。つまり、もし発話の意図が子供に「箸を持って遊ぶと危ない」という認識をよりはっきりさせるのではなく、新たな「情報」として子供に提供する（呼びかける）のであれば、(16)のcが自然な発話であろう。一方、(17)bの場合は認識をあらためる発話であるため、“不是…吗？”の機能を果たしている。これが、(16)bの例が不自然と感じられ、(17)bの例が自然と感じられる理由であろう。

3. 意外性について

本稿で集めた“不是…吗？”の86例のうちで、「意外性」を表しているのは4例であった。このことから、「意外性」を表す使い方は、反語文の“不是…吗？”におけるプロトタイプ的な用法ではないと言えるかもしれない。しかし、ほかの形式の反語文と比べて、意外性を表すことができるのは“不是…吗？”のみである。また、従来の研究では、反語文の「意外性」表現についてあまり指摘されていない点を考えると、“不是…吗？”における「意外性」を解明することは必要なことであろう。以下では、例文に基き、日本語と比較しながら、どのような文脈で「意外性」を表しているのかを見てみよう。

(18) 屯子里的女人见了，惊奇的说：“呦，这不是秀子吗？”

(小站的黄昏 礼平)

(19) 我把图摊开来，忽然之间我叫起来，“这不是我吗？图片中明明是我。”……“谁拍摄的？”我讶异莫名。(曾经深爱过 亦舒)

上の2例を見ると、話し手が意外な事態に気づいた時に発せられた発話であり、「驚き」と「不思議」の気持ちを表していることが分かる。(18)のような発話は、呼びかけの時に使い、久しぶりに会った友人に対して、親しい気持ちや、また、意外な場所で会ったことに対して「どうしてここに居るの？」のような不思議な気持ちを表す表現である。

次の二つの例も話し手の「意外」の気持ちを表している。

(20) 小林問：“你不是在公司吗？怎么又卖起了板鸭？”

“公司倒闭了，就当上了个体户，卖起了板鸭。”

(一地鸡毛 刘晨云)

(21) “你们不是要搬家吗？” “没搬，新房子分不下去就没搬。”

(浮出水面 王朔)

この2例の違いは、(20)の方は、その「不思議」の気持ちが“怎么又卖起了板鸭？”によって言語化されているが、例(21)の“怎么没搬呢？”の発話は言外に含まれている点である。

次に、日本語の「～ではないか」が、「意外性」を表すのはどのような文脈であるかを見てみよう。

(22) a. なんだ、まだ9時じゃないか。(宮崎 1993)

b. * 不是才9点吗？

b' 你怎么说晚呢，这不是才9点吗？

c. 才9点啊。

(23) a. あれ、雨はやんでるじゃないか。(宮崎 1993)

b. * 啊，雨不是停了吗？

b' 雨不是停了吗？还带什么伞啊。

c. 啊，雨停了。

宮崎(1993)はこれらの表現を話し手が意外な事態に気づいた時に発せられた「独り言」として扱っている。一方、中国語の場合は、独り言として扱うと、(22)b (23)b 共に非文になる。中国語の場合は、“不是…吗？”を用いて、独り言ができるのは話し手自身のことを言及する時に限る。(例えば、“我这不是太傻了吗？”と独り言で言う場合。)自分以外のことに言及する場合は、聞き手に働きかけることになってしまう。(22)b (23)b が不成立の理由はこのためであろう。対話文として扱うと、b' になるが、これは聞き手を非難する意味となり、「意外性」を表してはいない。

次の日本語の例は対話文であるが、やはり中国語では成立しない。

(24) 美樹 「お味噌ないじゃない、貞九郎さん」

貞九郎 「あ、切れてる……買ってきますよ」(蓮沼 1993)

(24) * 大酱不是没了吗？ 贞九郎。

(24) ”啊, 大酱没了。

日本語の場合は、話し手が新しい事を発見する時、その意外の気持ちを事態を知らない聞き手に伝えることができる。これは、宮崎 (1993) が指摘したように、日本語の「～ではないか」は「情報を話し手領域において確認する」という特徴を持っているからである。一方、中国語の方は、すでに述べたように、聞き手が情報を知らなければならないという前提があるため、話し手が聞き手の知らない事を発見した時には、平叙文しか用いられないのである。逆に、聞き手が知っている情報であれば、“不是…吗?” を用いて意外の気持ちを伝えることができる。(例えば、“啊, 这不是你一直没找着的笔吗?”)

ところが、聞き手が情報を持っていても、話し手は“不是…吗?” を用いて意外の気持ちを伝えることができない場合がある。例えば、次の場合。

(25) いつも遅く帰宅する夫に対して妻の発話。

- a. あら、今日は早かったじゃない。
- b. * 诶, 你今天不是回来得挺早的吗?
- b' 你说你回来得晚, 这不是挺早的吗?
- c. 诶, 今天这么早就回来了。

すでに本稿の2で検証してきたように、“不是…吗?” を用いる際に、ギャップの存在が明らかである場合以外は、そのギャップを表す先行の発話が必要である。従って、b は非文であり、b' のように言わなければならない。しかし、b' の発話は、発言と行動が一致していない聞き手に文句を言っているように聞こえ、驚いている気持ちを表していない。「意外性」を表すには、c のような平叙文でなければならない。

このように、“不是…吗?” によって表されている「意外性」は、情報の有無と認識と状況のギャップがあることを前提としている。さらに、“不是…吗?” によって、「意外性」が表されていると同時に、不思議の気持ちが伴い、その不思議の気持ちを相手に問いかけている。これは、平叙文で表される「意外性」とはニュアンスの違う点であろう。

4. 判断のモダリティについて

日本語の「～(の)ではないか」における機能の一つは、「推測」を表

すことである。そして、疑問文の「…したか?」「Vのだったか?」と比べて、「～ではないか」は「傾き」を持っているのが特徴であると指摘されている。その「傾き」とは「ある命題の真偽を聞き手に問いかけるとき、話し手にどちらの値への見込みが存在することである。通常、否定疑問文には肯定命題への「傾き」が存在していると言われる。」(安達1999)例を挙げてみると、次のような例がある。

(26) (不審な様子から) a. どうもあの男犯人じゃないか。

(田野村 1988)

b. 那男的不是犯人吗? (怎么放出来了呢。)

(27) a. もしかして、君の言っていることは嘘なんじゃないか。

(宮崎 1998)

b. 你不是在说慌吗? (=你就是在说慌。)

c. 你不是在说慌吧? (你是在说慌吧。)

(28) a. もしかして、太郎は花子と付き合っているんじゃないか。

(宮崎 1998)

b. 太郎和花子不是在交朋友吗? (=太郎和花子就是在交朋友。)

b' 太郎和花子不是在交朋友吗?

(你怎么说他们俩什么关系都没有呢。)

c. 如果我没猜错的话, 太郎和花子在交朋友吧。

上の日本語の例においては、証拠の存在や、確信度の強弱からみると、日本語の場合は「傾き」((26)a. あの男は犯人だろう。(27)a. うそだろう。(28)a. 付き合っているだろう。)があるものの、確信的な表現ではない。そのため、話し手は「推測」を通して、聞き手に「同意」を求めようとしている。一方、中国語の表現を見ると、話し手は命題が真であることにまったく疑問を持っていない、意味的には肯定文の強調形に当たる。ただ肯定文の強調と違うのは、反語文の場合は聞き手に問いかけている点である。例(26)b.を見ると、話し手の言外の意味は場面によって、いろいろ考えられるが、例えば、話し手は「監獄に居るはずの犯人がどうしてここに居るのか」ということを聞き手に問いかけていると考えられる。例(27)bは命題の内容そのものが結論的な表現なので、言外の意味は含まれていないが、聞き手に反論させないような強い表現である。例(28)bも聞き手に「どう

して現実と違うことを言ったのか]のようなことについて説明を求めようとしている。

すなわち、日本語では、話し手の「推測」を表しているが、中国語では話し手の「追究」や「結論」を表しているという相違がある。

反語文の“不是…吗？”が「推測」の機能を持つかどうかを確かめるため、86例について観察したが、推測を表す例はなかった。結論として、反語文の“不是…吗？”は推測の機能がないことになる。

さらに、86例の使用分布から見ると、次のような分布状況が見られた。まず、“不是…吗？”は語気副詞である“岂”“难道”“何尝”との共起、及び指示代詞の“这”“那”及び副詞の“还”との共起が多く見られた。例えば、次の例である。

(29) “你就这么呆着吧，……，我养着你” “你养我？” 岂不是
颠倒鸳鸯！（空中小姐 王朔）

この例は話し手が聞き手の発話に対し、「とんでもない」と思うときに発せられたことばである。もう一つの例を見てみよう。

(30) 阿眉脸有点红，没说话 “为什么？” “还不是为你。”
（空中小姐 王朔）

これは二人の恋人同士の会話であるが、彼は泣きそうな彼女を見て、“为什么？”と尋ねたら、彼女は“还不是为你。”と答え、「あなたのせいに決まっている」という気持ちである。

(29)(30)の例を見ると、話し手は断言的に言っていることが分かる。“岂”“还”との共起で、断定の語気がさらに強くなる。このように、中国語の“不是…吗？”を用いる場合は、話し手の「強い判断」の気持ちを表している。

また、判断の強弱については、「そうだ」「らしい」「听说」のような伝聞形と共起するかどうかによって、見ることができる。

(31) a. 「おふくろにも、渡したそうじゃないか、どこにそんな金がッ」
（蓮沼の例文）

b. ? 听说你不是已经把钱交给母亲了吗？这钱是从哪儿来的？

(32) a. 「(君の結婚相手) なかなか素敵な人らしいじゃないか」
（蓮沼の例文）

b. ? 听说你对象不是挺帅的吗？

また、日本語の「ではないか」は思考動詞とも共起することができる。

(33) a. 私はこの手紙面白いじゃないかと思った。 (安達の例文)

b. ? 我觉得这封信不是挺有意思的吗？

(34) a. 私はめぐみもたまにはいいことも言うじゃないかと思った。

(安達の例文)

b. ? 我觉得她不是偶尔也能说到点子上吗？

(31)a(32)a(33)a(34)aでは、「らしい」「思った」などと共起しているが、中国語では、(31)b(32)b(33)b(34)bでは不自然である。このように、中国語は“听说”“觉得”のようなことばと共起しにくいことが分かる。その理由は、伝聞は話し手にとって間接的な情報であるため、強い語気を持つ反語文の“不是…吗？”とは合わないからだと考えられる。また、“觉得”のような思考動詞は、話し手は自分の観点を述べるだけであって、相手に同じ観点を持つことを求めようとしない。これは反語文の意味特徴として、邵敬敏(1996)が指摘した“导向性”とも相反する。“导向性”とは、聞き手に賛同を強制的に要求することを言う。(“传递说话人的一种‘约束’力量，……强制性要求对方赞同。”))

以上の観察を通して、日本語の「ではないか」は「弱い判断」のモダリティの性質を持ち、中国語の“不是…吗？”は「強い判断」のモダリティの性質を持っていることを検証した。

5. 「確認要求表現」と「原因追究表現」

宮崎1998は、さらに、日本語の「(ノ) デハナカッタカ」について、「状況と話し手の認識の間にギャップがあることを動機とする確認要求表現である。(中略) 話し手の記憶に基く確認要求表現と性格づけられる。」と指摘している。すなわち、記憶というのは定かではないから、確認を求めるのである。ここでは、「確認要求表現」について、中国語はどうか、次の例を通して見てみよう。

(35) a. 髪が濡れてるけど、傘持ってたんじゃないか？ (宮崎1998)

b. 看你头发都湿了，你不是带伞去了吗？(怎么头发还湿了昵？)

(36) a. あれ？この仕事は君がやるんじゃないか？ (宮崎1998)

b. 诶？这个工作不是你要干的吗？（怎么又不干了呢？）

(37) a. あれ？君、確か、休学中じゃなかった？（宮崎 1998）

b. 诶？你不是在休学吗？（怎么又来了呢？）

(38) a. この論文、（僕は）もう読んだんじゃなかった？

（この論文、僕はもう読んだような気がする）

b. 这篇论文我不是已经读过了吗？（你怎么还让我读呢？）

(35～38)a は、「確認要求表現」である。しかし、(35～38)b には、「確認要求表現」の意味はない。中国語では「原因追究表現」である。中国語の場合は、“不是…吗？”を用いる際の話し手の心理は、自分の認識に対し、まったく疑問を持っておらず、確信を持って表現しているのである。話し手が聞き手に求めているのは、自分の確信している事実と反する現状がなぜ起こったのかという説明である。上の例から言うと、b の括弧にあることばこそが話し手が本当に知りたいものである。聞き手からみると、このように問いかけられたら、当然、その命題の真偽について答えるのではなく、その理由について答えなければならない。この日本語と中国語の相違を(39)で見してみる。

(39) a. A 教師：この論文、もう読んだんじゃなかった？

B 学生：いいえ、まだ見ていただいていないんですけど。

b. A' 教师：这篇论文我不是已经读过了吗？

B' 学生：？不，我还没给您看呢？

B'' 学生：啊，我又增加了不少内容。

(39)a では、B は A の命題の真偽について答えている。しかし、(39)b では B' のように日本語と同じく命題の真偽について答えてしまうと、中国語としては質問 A の意図とは合わず、容認度が低い。一方、B'' はその理由について答えているので、適切な応答となる。

“不是…吗？”における「確認」の機能については今まであまり指摘されていないようである。本稿では、反語文の“不是…吗？”において「確認」の機能があるかどうか、あるとすれば、日本語の「～ではないか」における「確認」の機能と同じであるかどうかについて調べた。集めた 86 の例文について観察した結果、次の 1 例が見られた。

(40) “两家大叔，我都听到了。我有个说法，你们听听行不？”……

“这位大叔，不是要面子吗？”“是。”“这边呢，不是要养老吗？”
 “对。”（小站的黄昏 礼平）

ここでの“不是…吗？”は確認の用法である。ただし、上で挙げた日本語の確認の例とは違う点を感じられる。それは確信度の違いである。日本語の方は確信度が低く、中国語の方は高い。この確信度の差を感じさせる理由は、日本語の例では、すでに述べたように、「記憶」に基づいた確認である。それに対し、(40)は「事実」（“两家大叔，我都听到了”）に基づいた確認である。中国語の確認というのは、話し手が自分の認識に自信がないから確認するのではなく、聞き手の認識を再度確かめたいから用いられたのである。

以上の考察から、日本語の「～ではないか」は「確認要求表現」であるのに対し、中国語では、「原因追究表現」であるということが分かった。

6. むすび

以上、中国語の反語文である“不是…吗？”について、日本語と比較しながら論じてみた。日本語の比較により、“不是…吗？”はどのような文に用いられ、また、どのような制約があるかが明らかになった。機能における主な違いを次にまとめた。

中国語の反語文である“不是…吗？”の主な機能は、「反駁」「原因追究」「責め」「意外」「注意を促す」（“提醒”）「独り言」（自分の事を言及するに限る）「事実確認」「結論」である。そして、日本語と比べて、中国語の“不是…吗？”は、「評価」「仮説提示」「推測」「記憶確認」「話題提出」の機能を持っていない。このような相違が生じた理由として、聞き手はすでに情報を持っていないなければならないこと、また話し手と聞き手における認識のギャップがなければならないことを前提としている“不是…吗？”と、これらのことを前提としない「～ではないか」の違いから生じたのではないかと考えられる。

また、本稿は今回音調及び形式と意味の関連について触れなかったため、今後の課題にしたい。さらに、コミュニケーションの観点から見ると、Politeness理論との接点が考えられる。Brown & Levinson (1978) は、言語の使用面に視点を置き、「円滑なコミュニケーションを維持するため

のストラテジー」]としてポライトネス理論を提唱した。Brown & Levinsonによれば、人間には二つの face がある。Negative face と Positive face である。Negative face には、自分の領域を守りたい、邪魔されたくない、行動を自由に選択したいというような面があり、Positive face には、相手によく思われたい、認められたい、尊敬されたいというような面がある。人間はこの二つの face を守るために、うまく配慮をしながらコミュニケーションを行う。そして、face を脅かす行為を FTA (Face-threatening act) と呼ぶ。この理論に従い、反語文の“不是…吗?”と「ではないか」の違いをもう一度見直すと、次のような例から、違う観点からの相違を指摘することができる。

- (41) a. 最後の部分を前に出した方がいいのではないかと思います。
 b. ……という場合も考えられるのではないかと思います。

このような日本語の表現は「仮説提示」であり、丁寧な言い方とも言える。一方、中国語の場合はどうであろうか。

- (42) a. 我认为你把结尾的部分放到前面写不是更好吗?
 b. 我认为从……角度不是也可以考虑吗?

(42)の中国語を見ると、話し手は聞き手に「仮説提示」をしているのではなく、聞き手に自分の見解を強く主張している。また、聞き手より上の立場に立って下に向かって発言しているようにも思われる。

このように、日本語の場合は、「～ではないか」を用いることにより、相手の face を守ることになるが、中国語の場合は、“不是…吗?”を用いることにより、自分の観点を相手に強く押し付けていることが感じられ、相手の face を脅かすこととなる。反語文とコミュニケーション理論の接点を考えることを今後の課題にしたい。

<付記>

本稿の執筆にあたって、相原茂先生よりご指導をいただきました。また史有為先生、魯曉琨先生からも貴重なご意見をいただきました。ここにあわせて感謝を申し上げます。また、244研究会、現代中国語研究会で有意なコメントを下された皆様にもお礼を申し上げます。そして、日本語のチェックだけではなく、ご助言も下さった友人の若森幸子さんに心より感謝します。

〈主要参考文献〉

- Brown, P and Levinson, S. 1987 Politeness. Cambridge University Press.
- 常玉钟 1992. 〈试析反问句的语用含义〉《汉语学习》1992 第 5 期。
- 郭继懋 1997. 〈反问句的语意语用特点〉《中国语文》1997 第 2 期。
- 邵敬敏 1996. 《现代汉语疑问句研究》。华东师范大学出版社。
- 1999. 〈关于疑问句的研究〉《语法研究入门》吕叔湘 马庆株主编 商务印书馆。
- 史金生 1997. 〈表反诘的“不是”〉《中国语文》1997 第 1 期。
- 苏英霞 1998. 〈“不是……吗？”句的语用分析〉《对外汉语教学讨论集》 北京大学出版社。
- 萧国政 1997. 《现代汉语语法问题研究》。华中师范大学出版社。
- 徐盛恒 1999. 〈疑问句探询功能的迁移〉《中国语文》1999 年 第 1 期。
- 安達太郎 1999. 「日本語疑問文における判断の諸相」。くろしお出版。
- 田野村忠温 1988. 否定疑問小考「国語学」152 集。
- 宫崎和人 1993. 「～ダロウ」の談話機能について「国語学」194 集。
- 1998. 「否定疑問文の述語形態と機能—「(ノ) デハナカッタカ」の位置付けの検討—」。
- 1999. 「国語学」194 集。

[追記] 本稿において出典の記されていない例文は筆者の作例である。